

聖書日課 『からし種』 2023.2.26-3.5

| | |
|--|--|
| <p>2月26日 (日) 士師記 6章</p> | <p>「あなたのその力をもって行くがよい。あなたはイスラエルを、ミディアン人の手から救い出すことができる」(14節)。主から「あなたのその力をもって行け」と言われたものは、ギデオンの目には「最も貧弱で、いちばん年下で」(15節)、とても「力」と言えるものではなかった。けれども主が共にいてくださる時、「貧弱で小さな力」が主の働きとされることを覚えたい。</p> |
| <p>27日 (月) 士師記 7章</p> | <p>「もし下っていくのが恐ろしいなら、従者プラを連れて敵陣に下り、彼らが何を話し合っているかを聞け」(10節)。「三百人でほんとうに敵に勝利できるのか?」。三万人の兵士を三百人に減らす主の命に従ったギデオンだったが、彼は自分の中に「恐れ」を認めざるを得なかった。しかしそんな「恐れ」を抱えた自分と共に歩んでくださる主の慈しみを体験していく。</p> |
| <p>28日 (火) 士師記 8章</p> | <p>「それはギデオンとその一族にとって罌となった」(27節)。人間の目には良く見えても「死への道」に至るものがある(箴言14:12)。神の命に従って勝利を得たギデオンの心にわずかな隙間が生まれ、神の御心を尋ねることなく「これくらい良いだろう」と自己判断した時、ギデオンとその一族は大きな罪の中に沈んでいった。「小さなことに忠実」な信仰を求めたい。</p> |
| <p>3月1日 (水) 士師記 9章</p> | <p>「神は、アビメレクが七十人の兄弟を殺して、父に加えた悪事の報復を果たされた」(56節)。アビメレクの悪事が裁かれるまでに、おびただしい人々の血が流されていく。悪に悪をもって報復し合う男たちの姿に暗澹たる思いになる。空しい殺戮に終止符を打ったのは、一人の女性の手から放たれた「挽き臼」だった。神の支配の前に小さくされる信仰を求めて。</p> |

聖書日課 『からし種』 2023.2.26—3.5

| | |
|--------------------------------------|---|
| <p>2日 (木)</p> <p>士師記 10章</p> | <p>「彼らは主を捨て、主に仕えなかった」(6節)。聖書の神は、イスラエルの人々に見えないものに目を注ぐ信仰、神を愛し、隣人を自分のように愛する生き方を求めた。けれども人々はその神に背を向けて暮らしの安定を第一に求めた。「神の正しさよりも暮らしの安定」。それは私たち自身の姿ではないか。今日わたしの心は第一に神を求めているだろうか。</p> |
| <p>3日 (金)</p> <p>士師記 11章</p> | <p>「来る年も来る年も、年に四日間、イスラエルの娘たちは、ギレアドの人エフタの娘の死を悼んで家を出るのである」(40節)。これほど痛ましく悲しい話はない。なぜエフタの娘は死ななければならなかったのか。エフタの娘の言葉を信仰的に美化してはならない。「律法による義」を終わりにし、「信仰による義」の始まりとなられた主イエスの十字架を覚えたい。</p> |
| <p>4日 (土)</p> <p>士師記 12章</p> | <p>「そのときエフライム人四万二千人が倒された」(6節)。「シイボレットと言ってみよ」と尋問して、正しい発音ができないと殺された人びとの数に戦慄を覚える。同様のことが、かつて関東大震災でも起こり、今ロシアのウクライナ侵攻でも起こっている。主イエスが十字架にかかるまでに愛してくださった一人ひとりの命が、そんなことで空しく奪われてよいはずがない。</p> |
| <p>5日 (日)</p> <p>士師記 13章</p> | <p>「そこでマノアは、主に向かってこう祈った。『わたしの主よ。お願いいたします。お遣わしになった神の人をもう一度わたしたちのところに來させ、生まれて来る子をどうすればよいのか教えてください』」(8節)。妻が知らせた主の御使いの話を疑うことなく、使命をともに担えるように祈る夫マノア。互いに信頼し、励まし合う二人の間にサムソンは生まれた。</p> |